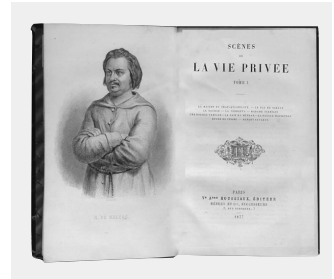


## 佛蘭西書巡覧 8

平山 弓月

バルザックは当時の社会に生きていた人間の典型を描こうとしたように思われますが、その目的のために、小説に登場する一人の人間をとりまわっている環境を描写し、環境からその人物の特性を明らかにしていきます。  
岩波文庫版『増補フランス文学案内』



本学でも「本の虫」プロジェクトという、読書の楽しみを伝える運動が進行しています。そこで今回は冬の夜長を、じっくりと腰を据えて文学の世界に身を浸してみても、小説の世界へお誘いしましょう。

近代的な意味で「小説」が文学のジャンルとして成立したのは、オノレ・ドゥ・バルザック *Honoré de Balzac* (1799-1850) 以降ではないでしょうか。パリの西方トゥールでブルジョワ家庭に生まれた彼は、父親の反対を押し切って文学の世界に飛び込みました。出発点では、文学の「王道」である韻文戯曲を目指したのですが、見事に失敗し小説へと転進しました。イギリス人小説家ウォルター・スコット *Walter Scott* (1771-1832) の歴史小説の強い影響の下に執筆した『最後のふくろう党』 *Le Dernier Chouan* (1829) で成功を収めました。

一方でバルザックは事業欲の強い人物であつたらしく、金もうけのために、出版業や印刷業に手を広げましたが、ことごとく失敗し莫大な借金を背負い込むこととなりました。文学の世界では、売れた本の部数に応じて作家にお金が支払われるという「印税」がまだ確立していませんでしたので、バルザックはこの山のような借金や、さらには浪費癖による借金を返済するために、猛然と創作活動に邁進したのです。著作活動は、眠気が襲ってくればコーヒーをがぶ飲みしながらも、もっぱら夜中にされたといわれています。

このようにして彼の名作と評価されている『ゴリオ爺さん』 *Le Père Goriot* (1835)、『谷間の百合』 *Le Lys dans la vallée* (1836)、『幻滅』 *Illusions perdues* (1837-38)、『従兄ポンス』 *Le Cousin Pons* (1847)、『従妹ベット』 *La Cousine Bette* (1847-48) などが生み出されていったのです。

バルザックは1842年には、自らの作品を、イタリア人ダンテ *Dante Alighieri* (1265-1321) の『神曲』 *La divina commedia* (1307-1371) に倣って、『人間喜劇』 *La Comédie humaine* という総タイトルの下に纏め上げることを思いつきました。その中で作品を「私生活情景」と「哲学小説集」の二系列に分類し、その俯瞰図にしたがってその後も仕事を進めてゆきました。

彼の作品の醍醐味は、「作中人物回帰法」にあります。これは、ある小説での中心人物が、他の作品では脇役として登場して来るといったもので、作品が一つ一つ孤立独立したものだけではなく、作品群全体としても、ある一つのまとまりを見せる、といった技法です。これによって作家は、19世紀前半のパリを、絵巻物のように見事に描き出したのです。

バルザックの人物は、皆それぞれ人間の情念を色濃く表しています。欲望・嫉妬・父性愛・探究心・権力欲などなど、19世紀前半の人々が持っていたそれらと、現代の私たちが持っているそれらと、それほど変りはありません。気がつかないことに気付かされることがあるでしょう。描写がやや「微に入り細に入る」きらいがありますが、読み進めば作品世界に引き込まれ、それほど気になるものではありません。

本学の図書館には、一大コレクションを形成するほど、バルザックの作品が、様々な版で所蔵され、皆さんの目に触れるのを待ち構えています。もちろん翻訳されたものもあります。ぜひとも、文学の、小説の愉悅に浸って頂きたいと願います。

ひらやま ゆづき (教授・フランス語・フランス文化論)